

---

# 大人の時間

ランデブー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大人の時間

### 【Nコード】

N8575A

### 【作者名】

ランデブー

### 【あらすじ】

子供の時九時になると、「寝なさいと」と言われた事ありませんか？「何で子供は九時に寝ないとイケないの？」と聞いたことありませんか？そして、「大人の時間だからよ」って言われませんでしたか？コレは、大人の時間を怪しく描いたホラー作品。

## （前書き）

怪しい設定だと思うので12禁ぐらいかもしれません。文章が御粗末ですが、お楽しみください¥（^O^）ノ

時刻は八時丁度。

後一時間で寝る時間だ。

何で子供は九時に寝ないといけないんだろう？

僕はそう思い、友達と話した事があった。

……

「皆はどう思う？ 子供だけが、九時に寝ないとイケない事」

「九時から先は、大人の時間だからしょうがないよ」

「大人の時間は、子供が見ちゃイケない世界が広がってるんだって」

「今度皆で、大人の時間まで起きてみる？」

「それは無理だよ。眠たなくても、九時になれば自然に瞼が閉じるんだから」

「そうだよね。アレはまるで、魔法だよね」

僕と友達二人は、大人の時間に興味を持っていた。

大人の時間には一体何があるんだろう？      どんな世界が広がってるんだろう？

今思えば、大人の時間になんて興味を持たなければ良かった……。

今日の夕食はステーキだ。とても美味しい……だけど、愛情なんて伝わらない。僕の家族は今、バラバラになろうとしてるんだ。

お母さんは知らない男の人とイチヤイチャしてて、お父さんは知らない女の人とイチヤイチャしてるって話だ。ただの噂だから、僕は信じてないけど。

「……ティッシュ取って」

「……はい」

会話はそれだけだ。コレが会話って言えるのかは分からないけど、たったコレだけなんだ。

その時、中学二年生のお兄ちゃんが――

「お前らホント最悪だな！ 大人の時間は子供は起きてないから、何でも出来るんだな？ カメラでお前らの不様な姿撮ったから、言い訳したって無駄だよ」

崩壊へと導くスイッチを、押してしまった。

「良介、お前は何をやっているのか理解しているのか？ 子供が大人の時間に起きていてはイケない、知っているな？」

お父さんは、鬼のように怖い顔で言った。

「貴方は悪い事をしたんだから、反省しないと筋違いよ。だから、覚悟しなさいね……良介」

お母さんは、まるで悪魔のようだ。

お父さんとお母さんは、大人の時間に起きていた事を怒ってるのか？  
ソレとも、日頃のストレスを子供にぶつける気なのか？

「ウルサイんだよ！　お前らがいつも、あんな態度をしてるから悪いんだろ？」

お兄ちゃんは、壁を思い切り殴り怒鳴った。

「おとなしくしろ」

お父さんは静かにそう言うと、お兄ちゃんの腹部を力一杯殴った。

そして、おとなしくなったー

「お前は、良介みたいに大人の時間に起きてちゃイケないよ。大人の時間つてのは、とても危険な世界なんだ……一度迷い込んだら、二度と出られない」

怖いよ……逃げなきゃ……

「ハハハ……。ソイツも殴っておけば？　そして、手枷足枷を付けて放置プレイとかしちやったら」

「ワアアアー！！」

僕は叫び、助けを呼んだ。

「アハハ、怖がらなくても大丈夫よ。お前は、変態雌豚野郎に飼われるんだからさ、アハハハハ」  
お母さんは、怒れていた。

「許してくれ。大人の時間に迷い込んでしまった、哀れな大人を許してくれ」

お父さんは、涙を流しながら僕に近付く。

ドスッ……

目の前が真っ暗になった。

十

僕はどうなったんだろう？ 死んだのか、生きているのか。多分生きてると思うけど、僕を待っているのは生き地獄だと思う。

いつそのまま死にたい。天使が僕を迎えに来てくれると、願いたい……。

するとその時、

「……しろ！ ……覚ませ！」

微かに声が聞こえた。

「しっかりしろ！ 目を覚ませ！」  
ハッキリ声が聞こえた。

――

「みんな……」

「よかった、目を覚まして。心配したよ」

「死んだと思ったじゃんかー！」

友達は、僕の事を心配してくれている。

「みんなアリガトウ。それで、ここは何処？」

僕と友達がいる部屋は、何に使うのかワカラナイ道具が沢山あった。

「……拷問部屋かな？　それとも、処刑部屋かな？」

「怖いよ……」

二人は、ブルブルと震えていた。

「……」

カチツ……カチツ……

「もう、九時だ」

カチツ……ゴーン……

「大人の時間ー」

九時になると同時にゴーンという鐘の音が鳴り、何処からか霧が出てきた。

そして、右往左往から悲鳴が聞こえてきた。

『キヤアアアー！』

『来ないで！』

僕は怖くなり、両耳を手で塞いだ。

「君、怖いのか？大丈夫よ、お姉さんが優しくしてあげるから」



「えっー？」

目の前に、お姉さんが立っていた。ドアが開いた音なんてしなかったのに、どうやってココに入ったんだ？

「フフフ……大人の時間が、何をする時間なのか分かる？　楽しい楽しい遊戯をする時間なのよ」

ドクドクー

「泣かないで笑ってよ。だって、今から皆で遊ぶんだからさあ」

ドクドクドクー

「さあ、さつさと立ちなさい。そして、そのテーブルに寝転がりな」

ドクドクドクドクー

鼓動が激しくなっていく。

十

「わあっ！」

僕は、突然目が覚めた。

「さっきのは夢なのかな？　……怖かった」  
胸に手を当てて、ホッと息をつく。

「……ん？ 何かお尻が冷たいなあ。まさか……」  
少年は、布団を恐る恐る触ってみた。案の定冷たい。  
「おねしょしちゃった。どうしよう、コレ？」

カーテンの隙間から、陽光が射し込んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8575a/>

---

大人の時間

2010年10月14日09時10分発行